

編集委員が 行く

訓練にしない。仕事は仕事

社会福祉法人豊芯会

本誌編集委員 みなと障がい者福祉事業団 大森八恵子



編集委員から

このたびの豊芯会の取材で、障害のある方の働く場の提供を改めて思いました。A型事業所での障害者の仕事を、「訓練にはしていない。仕事は仕事です」という言葉を、噛みしめたいと思います。

(写真) 小山博孝

会社データ

社会福祉法人豊芯会

〒174-0004 東京都豊島区北大塚3-34-7 豊芯ビル
TEL 03-3915-9051 FAX 03-3915-9166

フードサービス事業所(配食センター)

〒174-0004 東京都豊島区北大塚3-34-7 豊芯ビル2階
TEL 03-3915-9052 FAX 03-3915-9166

Café(カフェ)ふれあい

〒174-0004 東京都豊島区東池袋1-20-15 生活産業プラザ2階
TEL・FAX 03-3971-2155

- 代表者：上野容子 ■法人登記：1995(平成7)年11月
- 事業内容：就労移行支援事業、就労継続支援事業A型・B型、相談支援事業、地域活動支援センターI型・II型、精神障害者共同作業所、居宅介護支援事業、ホームヘルパーサービス事業、共同生活援助、地域生活を支援する事業
- 定員：A型事業所全体20人 ■勤務時間：3～8時間
- 報酬：平均月収約7万円(時給は最低賃金以上)

Keyword：精神障害、知的障害、調理、配食、就労継続支援A型事業所、ソーシャルファーム

POINT

- ① 調理から配食まで
- ② 配食とともに安否確認
- ③ 職員と利用者の協働



JR 大塚駅近くにある
豊芯会本部ビル

表 豊芯会の歩み

| | |
|-------------|--|
| 1978(昭和53)年 | 南大塚診療所(現ホヅミクリニック)の穂積登医師が自己資金で精神障害者の憩える場として「みのりの家」を開設 |
| 1981年 | 豊島区と東京都の精神障害者共同作業所通所訓練事業の開始 |
| 1989(平成元年) | 豊島区北大塚に精神障害者共同作業所「ふりいぞーん」を開設 |
| 1993年 | 「ハートランドふりいぞーん」を「ハートランドひだまり」に改称。地域の高齢者、在宅障害者を対象に食事サービスを提供する活動を開始し、施設を北大塚商店街に移転 |
| 1995年 | 豊島区内の三つの作業所と協同で「喫茶ふれあい」を豊島区生活産業プラザ2Fで開始。社会福祉法人豊芯会設立 |
| 1998年 | ハートランドひだまり、地域生活支援センターが連携して夕食サービス開始 |
| 2001年 | 「ひとり暮らし高齢者配食サービス事業」を豊島区と契約締結。地域生活支援センターを窓口として事業開始 |
| 2007年 | 「喫茶ふれあい」を「Café ふれあい」と改称して豊芯会の単独事業として運営 |
| 2008年 | 「マイファームみのり」を障害者自立支援法の多機能型就労支援事業、豊芯会「ジョブトレーニング事業所」に移行。食事サービス事業とカフェふれあいをA型事業所「フードサービス事業所」(配食センター)として開設 |

元気なA型事業所

とても気になっていた「社会福祉法人豊芯会」が東京都豊島区にあります。いま多くの市区町村で行っている「一人暮らし高齢者配食サービス事業」を、2001(平成13)年に精神障害者、知的障害者の人たちとともに起業し、事業化してきたのです。就労継続支援A型事業所

として全員に最低賃金以上を払い、社会保険や雇用保険にも加入するなど、とても元気な事業所です。この豊芯会の前身が活動を始めたときから現在までを、簡単に表にまとめました。

就労継続支援A型事業所(A型事業所)には、規制緩和に伴って多くの企業が参入してきました。本来なら雇用の受け皿になってほしい企業が、福祉事業に参入してきたのです。本来のA型事業所は、

2年間ないし3年間の就労移行支援事業で支援を受けたが残念なことに雇用に結びつかなかった人が、A型事業所を利用して、もう一度企業への就労を目指すという場であったと思います。あくまで福祉の事業だったのです。

今回は、豊芯会の多くの事業の中から、「配食センター」と「カフェふれあい」に焦点をあてることにしました。ともにA型事業所です。訪問したこれらのA型事業所は、旧制度の小規模作業所からスタートしたところです。

弁当を作って配る

山手線大塚駅から徒歩10分、豊芯会本部ビルの「配食



弁当づくりを見学する大森本誌編集委員

センター」で、昼の弁当作りで忙しい厨房を見学させていただきました。

照り焼きのソースの匂いが厨房に満ちています。重くて大きなフライパンを両手で持って肉にソースをからめている牛場伸子さん。牛場さんが振る大きなフライパンとガステーブルが奏でる、規則正しい大きな音が満ちている活気ある厨房です。

牛場さんは朝8時からフルタイムで働いています。作業所時代から12年間勤務の超ベテランです。

白菜を刻んでいる人がいました。福島さなえさんです。ここに来て3年になり



大きなフライパンで料理する牛場伸子さん



白菜の一夜漬けをつくる福島さなえさん



大熊大吉さん担当のご飯がたき上がった



打合せをする弁当配達班

ます。ご飯の計量をしている大熊大吉さんは、豊心会が運営しているグループホームから通っています。軽知的障害があります。メモを見ながら黙々と仕事をこなしています。大熊さんの前では、東京しごと財団からの委託訓練生が、弁当におかずの盛付けを行っています。壁際の食器洗浄機で、ボールなど調理器具類を洗っているのは寺田智一さん。寺田さんも作業所時代からのメンバーです。彼は弁当の配達も担当しています。

弁当は、お年寄りそれぞれのご希望、体調などを考慮して作っています。なかには嚥下^{えんげ}が困難なため、ミキサーでペースト状にして提供を受けている方もいら

っしゃいます。

2時間近く厨房の見学をして、気づいたことがあります。それは冷凍食品を見かけなかったことです。高齢者への配食サービスだけでも180食、そのほか精神科デイケアの弁当、寄宿舎の夕食、企業や学校へのケータリング、利用者の給食、「カフェふれあい」と「ハートランドひだまり」のランチなどを、添加物を使わず野菜を中心にした体にやさしい食材で作っています。野菜は地元の店から毎日届きます。豊心会が地域の一員であることの証しです。

ここではだれが職員で、だれが利用者か、まったくわかりません。ともに働く

とはそういうことなのです。それほど一体となって、違和感なく仕事をしているのです。

11時半ころから、地域のお年寄りへの配食が始まりました。調理器具などの洗浄をしていた寺田智一さんと、配食に同行させてもらいました。寺田さんは、「母との二人暮らしなので、自分が働かないといけないのです。いまは短時間だけでもっと時間を延ばせるように頑張ります」と歩きながら話してくれました。そして、自分にいつて聞かせるように、「働くって厳しいです」と何回もつぶやきながら歩きます。

一軒一軒歩いて配達しますが、ただ置



一軒ずつ歩いて配達する寺田智一さん



弁当は、体調や希望に応じてつくられる



一人住まいの高齢者の安否確認をし、声をかける寺田さん

いてくるだけではありません。チャイムを鳴らしても反応がないと「どうしたのかな」「寝ているのかな」と、とても心配そうです。お年寄りの顔をみるとホッとします。

「お変わりありませんか」「お弁当はいかがでしたか」「何か気になることはありませんか」と、安否確認を怠りません。配食サービスではこの声かけが大変重要です。一人住まいの高齢の方にとっては、人と接する楽しみでもあると思います。そのなかの一人は、「彼が届けてくれてうれしいですよ」とおっしゃいました。とても寒い日でしたが、心がポカ

ポカしたひと時でした。

元気が元気を生む

午後からは、同じA型事業所の「カフェふれあい」に変えて、常務理事で管理者の近藤友克さん、理事長の上野容子さんにお話をうかがいました。

カフェふれあいは、本部のある大塚駅の隣の駅、池袋駅から徒歩5分、豊島区の生活産業プラザの2階にあります。まわりには飲食店が乱立しており、このあたりでA型事業所として営業するのは難しいこともあるのではと思います。ここで昼食にしました。午前中に訪問していた配食センターから届けられた、限定13食の日替わりランチを、大変おいしくいただきました。

近藤常務理事に、豊芯会のフードサービス事業全体について聞きました。

「配食センター（配食部門）、カフェふれあい（カフェ部門）のA型事業所全体で定員は20人、勤務は3時間からフルタイムで、個人個人に合った時間で働いています。キャリアに応じて昇給もします。現在の平均月収は7万円くらい。精神障害のある方の短時間勤務が多いのですが、時給では最低賃金を保障しています。1人平均月10万円を目標にしています」

「事業収入が全体の64%、その他が給



池袋駅の近くにある豊島区立生活産業プラザ内にある「カフェふれあい」。コーヒーの評判もいい

付費や補助金（配食部門）です。2001（平成13）年は1600万円の売上げでしたが、その後、区の委託事業の増加、カフェ部門の吸収で、現在年間5300万円ほどです」

また、配食部門の弁当事業については、次のように話されます。

「高齢者への弁当は、豊島区と板橋区から『この人に』と指定されてきます。そこでインテーク（予備面接）をして、メニューや調理の方法を検討します。おかゆを希望する人やペースト状を希望する人にも対応



近藤友克常務理事

します。1食につき区からは350円の補助がありますが、弁当の種類によって自己負担が発生します。この分は食券を購入していただきます」

「最近はこの分野にも大手企業の参入があり、一時夕食が減りました。さすが大手は彩りよく作られています。大企業と競争するのは大変苦しいので、手作りの味や調理の工夫で差をつけるしかないと思っています。一番大切なのは、『安否確認』です。また、配達先の高齢者は、介護事業所のケアマネージャーが紹介してくれるので、ケースワーカーやケアマネージャーとの関係をよくしておく必要があります」

うかがった話をまとめると、豊心会のフードサービス事業全体には、次のような特徴とコンセプトがあります。

- (1) 職員も利用者も協働する場
 ・ 仕事はいろいろな役目に分かれているが、大切なのはチームワーク
 ・ 職員もボランティアもメンバーも、

一緒になって目標達成（訓練ではない）

・ 支援者が指導して、利用者が作業を行う形ではない

(2) 配食サービスを通じた活動

・ 弁当の約3割を利用者が徒歩で配食

・ 1日5〜6人の配食メンバー

・ 届けるときは福祉サービスの担い手

として行動。高齢者との交流も大切

(3) エンパワメントできる環境

・ みんなでできるといふ自信・励まし・

チームワーク

・ 利用者みんなが主役で、職員は利用者

者の主体性を引き出す支援者

・ 元気が元気を生む

ふれあいのカフェ

「カフェふれあい」の店長、齊藤健さんにカフェのこと、障害のことなどを伺いました。齊藤さん自身も障害がありました。以前は企業で働いていましたが、障害がわかって解雇されました。この店長がピアカウンセラー（*）の役割も果たしています。

「利用者にとっては、当事者だから聞けること、構えないで話せるから相談しやすいというメリットがあります」と齊藤さんは話します。

齊藤さんは会社を辞めてから、本部（配食センター）の厨房で2年間働いていま

（*）ピアカウンセラー＝障害当事者がカウンセラーを務める



自身も障害（統合失調症）がある「カフェふれあい」の齊藤健店長。ピアカウンセラーとしても活躍している

した。

「病気になる前は、人とのコミュニケーションが大きな要因でしたが、よくなってきたのも人とのコミュニケーションです。一人ではないという思いが大切だと思います」と振り返ります。

齊藤さんは、いま街中でよく売れているものは何か、調査を怠りません。また、「だれかが休んでも困らないように、だれでも同じものが作れるようにします。人によって味が違うということがないように、ミーンティングを大切にしています。売上げの目標を月70〜80万円にして、経費は店の売上げから出したかと思ってる」といいます。

そして、カフェふれあいのコーヒー豆が、南千住にある有名珈琲店のものだというのもうれしかったです。おいしいコーヒーを出す店で障害のある方々が働き、ピアカウンセラーとしても相談に乗

るといのは、「カフェふれあい」という名前前にふさわしい場だと思いました。

ソーシャルファームの可能性

理事長の上野容子さんは1978（昭和53）年、穂積登医師が私財を投げ出して「みのりの家」を立ち上げたときからソーシャルワーカーとして関わってこられました。最初は、心を病んだ人たちの居場所作りだったそうです。最初から関わっているのは、いまは上野さんだけです。

「みなさんは、一人ひとりいろんな力を持っていきます。機会と場を提供することとで、ご本人たちは、どんどん自分を取り戻してこられます」とおっしゃいます。「参加する人のなかから、『何か仕事のようなことをしたいね』という声が出てきて、文京区にある内職を紹介するところから、簡単な手仕事を紹介していただきました。それが地域の小規模作業所に

発展していききました」

そして、地域のいろいろな方から仕事を紹介され、飲食店で働いていた経験のある利用者の方からのヒントで弁当作りを始めました。最初は30食だったそうです。銀行からお金を借りて、規模を大きくしていきました。借入金は完済しています。その後、着実に売上げを伸ばし設備を充実させて、A型事業を始めます。

「豊芯会のフードサービス事業では、就労継続支援A型事業に、ソーシャルファームとしての展開の一つの可能性を見出して実践しています。豊芯会のA型事業は、一般就労を目指す通過点としてではありません。もちろん企業就労を目指す人も大事ですが、仕事を訓練にはいけないと思っています。仕事は仕事です」

さらに次のように続けました。「A型事業を活用して、働く場の創出をします。もっともっと活用して、補助金がなくてもやっていけるようになればいいなと思います。企業と違うのは、利益だけを追求しないこと。攻め合って事業展開するのではなく、補い合って事業展開をします。それがソーシャルファームの理念です」

これからは、ソーシャルファームの理念を取り入れた事業所が増えるように思っています。



上野容子理事長